

求められる技術力

1. 公共事業を取り巻く依然と厳しい環境 に対応した取組み

厳しい財政状況のもとで、東日本大震災からの復興事業や防災・減災への取組み、また、管子トンネル天井板落下事故を受けてのインフラの維持更新の取組みは避けて通れぬ、最も重要かつ緊急な課題です。また、東京圏においては、2020年オリンピック、パラリンピックの東京開催を受け、種々の社会資本整備の加速と効率的運用の一層の取組みも求められています。

その動きと連動する形で、特に最近の話題として、不調不落問題がさまざまな場面で問題視されることが多くなってきています。実際には、自治体発注の大型建築物を中心に事態が継続しているわけですが、一般の土木工事においても、人材や資材の先高感や条件の悪い工事について、入札不調が発生してきているとの認識を持っており、現場レベルでは、最新の単価を利用した積算の実施や、ロットの見直し、コンクリート二次製品の有効利用を行うなどのさまざまな知恵や工夫をしていただき、着実な事業進捗が図られてきています。

近年の建設投資の急激な減少を受けて、いわゆるダンピングなどの競争の激化、それによる企業の経営環境が悪化して倒産が発生するなど、企業の疲弊、下請け企業へのしわ寄せ、現場技能労働者の方々の就労環境の悪化などのさまざまな問題を惹起するに至っているところでは、

加えて、昨今続く公共事業悪玉論の中で、技能労働者や技術者の誇りの喪失、それが企業数の減少とあいまって、若者就職数の減少という構造的

な問題の発生にもつながっている状況にあります。このような状況が継続すれば、将来のインフラの維持管理や更新、近年増える傾向にあるさまざまな災害などへの対応もできなくなるなど、大臣の言葉を借りれば「町医者」のような貴重な存在がどんどん失われていくことにつながりかねない状況にあります。

2. 品確法改正の動き

現在、公共工事の品質確保の促進に関する法律（以下、「品確法」という）の改正を目指し、検討が進められてきています。今後、将来にわたる公共工事の品質確保を図るとともに、中長期的な担い手やダンピング防止を明確に掲げ、私たち発注者に対しても、予定価格の適正な設定や計画的な発注、円滑な設計変更を行うよう、また地元に明るい企業が受注しやすくなるように、複数年契約や共同受注できるような工夫を凝らすことなども求められることになると思います。

平成17年に制定された現行の品確法に伴って本格化した入札時の総合評価方式も、導入から10年を超える取組みによるさまざまな問題点や課題を解決するため、技術提案交渉方式や段階的選抜方式の導入など、民間のノウハウの活用を図りつつ、受発注者の事務的負担の軽減を図るための入札契約制度の改善も同時に行われようとしているところでは、

短期的な処方箋を準備して、あらゆる障害を排除すべく関係方面で努力してきていただいているところでは、しかしながら、中長期的な人材の枯

国土交通省 大臣官房技術審議官

もり
森

まさ ふみ
昌 文



渴は疑いようのない大きな課題として横たわっており、インハウスエンジニアの私たちを含む建設業界の技術者、技能者の入職者数の拡大、その資質向上が求められています。

3. 求められる技術力とは

現場を預かる私たちには、今何が求められているのでしょうか？すぐに思い浮かぶ大事なこととして、受注者になる業界との適切なパートナーシップ、一つのプロジェクトをまとめあげていく際の現場での関係者間のリーダーシップ、事業を進めていく際に関係するステークホルダーとの良好なリレーションシップ、…こんなことをいうとどこにでもある「あなたを成功に導く…」みたいなビジネス書になってしまいますので、これ以上はひろげませんが、私たちにはこの求められる力に、併せて技術に裏付けられた、特に現場において通用する技術力が要請されます。この力はどうすれば身につけられるのでしょうか？私は、この目で実際に現場を見ることではないかと思っています。

近年の積算は業務改善の観点から、積算項目をできるだけ包括的にまとめ上げてきた結果、以前なら、積算の過程で気づき、現場に行ってみなければならぬ工事手順を知らなくとも、工事は進むことになってしまいました。間違っていることをパソコン以外に指摘してくれなくなったのです。配置すべき機械の知識が不足していることも気づかなくなりました。当然、現場に行くインセンティブも喪失してしまった感が否めま

せん。土のうや蛇かごなどを十分準備できない法面崩落現場では、どんな工法で暫定復旧するのか、現場周辺で手に入る自然の材料でどこまで工夫できるのか、体験し考えていなければ、いざという時の対応や普段の時の工夫はできません。自らの工夫で自分の力を弱めている場合もあることを理解したうえで、どうすれば、現場を体験できるか、工夫次第でいろいろなことを見聞きすることができるかと信じ行動しましょう。

4. おわりに

決して環境がよいとは言えないこの土木の世界に身を置いていると、なぜこの世界を選んだのかとの質問を受けることがあります。少し頭を巡らしてみると、一つの光景が頭の中に広がってきます。

小学生低学年だった頃、広い校庭は水捌けも悪く、一雨ごとに沢山の池が校庭にでき上がったものです。そんな光景が目飛び込んでこようものなら、時間が許す限り、ひたすら校庭にダム建設と河川改修を繰り返していました。数日して校庭から水が引くと、河道はハイウェイになり、また、日が傾き、先生が帰宅を促しにくるまで、遊び耽っていた光景が浮かんできます。帰宅の遅さを母親に叱られることぐらいでは止められないほど楽しい、楽しい遊びだったし、その楽しさを未だに忘れないでいるのかもしれないとふと思い出し、無邪気すぎて、自分に素直すぎる人生に苦笑を禁じ得ません。